

『まことの王の姿』ヨハネ19:16-22

19:16 そこでピラトは、十字架につけさせるために、イエスを彼らに引き渡した。彼らはイエスを引き取った。

19:17 イエスはみずから十字架を背負って、されこうべ（ヘブル語ではゴルゴダ）という場所に出て行かれた。

19:18 彼らはそこで、イエスを十字架につけた。イエスをまん中にして、ほかのふたりの者を両側に、イエスと一緒に十字架につけた。

19:19 ピラトは罪状書きを書いて、十字架の上につけさせた。それには「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」と書いてあった。

19:20 イエスが十字架につけられた場所は都に近かったので、多くのユダヤ人がこの罪状書きを読んだ。それはヘブル、ローマ、ギリシヤの国語で書いてあった。

19:21 ユダヤ人の祭司長たちがピラトに言った、「『ユダヤ人の王』と書かずに、『この人はユダヤ人の王と自称していた』と書いてほしい」。

19:22 ピラトは答えた、「わたしが書いたことは、書いたままにしておけ」。

●序論

「王様は何でえらいの?」。皆さんはどうお答えになるでしょうか?

実際にわたしたちがイメージする王さまというのは、権力、支配力、力をもって国を治め、その国の力の象徴となり、また栄光と賞賛を向けるべき存在…というイメージではないか、と思います。

聖書に目を向けると、当時の「世界」と表現されるところは、ローマ皇帝、つまり王の絶対的な支配力のもとにおかれ、そのもとで、各地に派遣された総督などによって、統治されていたようです。

ユダヤ人たちは、そんなローマ皇帝の支配を嫌悪していました。そしていつか、自分たちのために立てられるダビデ王の再来を待ち望んでいたことは確かです。

けれども聖書のストーリーを見ると、その祭司長たちや民のリーダーたちは、人々がダビデの子と呼んだイエスを嫌悪し、彼を憎み、十字架で殺すために、「わたしたちには、カイザル以外に王はありません」(15)とも叫ぶようになっていたということを、先日まで見てきました。

つくづく、人は自分たちの都合に合うかどうかという自分が「王」であり、絶対なのかもしれません。

そういう状況下において、イエスさまはただ静かに人々の罵声を浴び、罵られ、鞭うたれてなお、その恥と十字架の道を自ら歩まれました。

聖書は、このお方に、本来賞賛されるべき「まことの王」としての姿を見せているのだと覚えていただきたいのです。

●本論

I. イエスをめぐる裁きの結末を見る

その争点はピラトの側から簡単に言うとイエスさまに「罪があるかどうか」でした。
:6 「わたしは、彼には、なんの罪も見いだせない」

しかし、祭司長はじめとしてユダヤ人たちの争点は、「イエスを十字架で殺せるかどうか」でした。
:15 すると彼らは叫んだ「殺せ、殺せ 彼を十字架につけよ」。

こういう中でキーワードとなったのが「ユダヤ人の王」という言葉でした。
イエスさまと最初に対峙したピラトが、イエスさまに問うた言葉こうでした。
「あなたは、ユダヤ人の王であるか」。(：33)
これに対してのイエスさまの答えはこうあります。
「わたしの国はこの世のものではない」。(：36)

「この世のものではない」という、イエスさまの言葉が象徴しています。
ピラトも知っている、この世が考える王とは、力で支配し、敵を倒し、己の栄光の座に就く存在です。 イエスさまはそれとは違う、と言われた。
事実、ピラトが見るイエスさまは、「この世の力」を持った人には見えませんでした。

しかしこの裁きの結論は、今日最初にお読みした通りです。
:16 そこでピラトは、十字架につけさせるために、イエスを彼らに引き渡した。
彼らはイエスを引き取った。

「引き渡した」という言葉が印象的です。
この福音書は、わざわざ「ピラトは、十字架につけさせるために、イエスを彼らに引き渡した」と記し、そして「彼ら（ユダヤ人たち）はイエスを引き取った」と言葉に残すのです。

そこには、①イエスを拒んだユダヤ人指導者たちがその責任を負った、ということであらわします。そしてもうひとつ、結果、②この世の力が結託して、イエスを十字架につけて殺したことをあらわしているということです。

十字架をめぐる物語で、このことははっきりしています。
しかし、神さまにあっては、そこで終わらない物語なのです。
ペテロの言葉を少しだけ引用しておきましょう。
使徒2:36 だから、イスラエルの全家は、この事をしかと知っておくがよい。
あなたがたが十字架につけたこのイエスを、神は、主またキリストとしてお立てになったのである」。

この世の醜いすべての出来事を、神さまは、救い主の物語に変えてくださったので

す。

19:17 イエスはみずから十字架を背負って、されこうべ（ヘブル語ではゴルゴダ）という場所に出て行かれた。

イエスさまは、誰かに無理やり引きずられるようにして十字架へ向かわれたのではありません。

またイエスさまは、だれかの策略に翻弄されたのではなく、この世の力に屈したのでもありません。自ら進んで十字架の道を歩まれたとあらわされる、そこに、静かにイエスの主権と意志が表されています。

ヨハネ10:18(新共同訳)に記されている通りです。

だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。

十字架は、神の御心による、イエスご自身の選びの道だったのです。

この世は、祭司長や律法学者たちは、裁くための偽証を求め、それが叶わないと、無理やりローマの総督を脅してでも、イエスさまを十字架につけようとしたのです。

しかし、イエスさまはそういう人々の罪を贖うために、「まことの王として」、愛と赦しの御業を完成するために十字架へと向かわれたのだということです。

それが、わたしたちを愛して、わたしたちのためにいのちをも捨てる「まことの王の姿」だったのです。

Ⅲ. 全世界へ向けられたメッセージを見る

:19 ピラトは罪状書きを書いて、十字架の上につけさせた。それには「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」と書いてあった。

:20 イエスが十字架につけられた場所は都に近かったので、多くのユダヤ人がこの罪状書きを読んだ。それはヘブル、ローマ、ギリシヤの国語で書いてあった。

当時のユダヤ社会、ローマ帝国、そしてギリシヤ語文化圏という、当時の世界を象徴する三つの言語です。

ユダヤ人の祭司長たちはこれに異議を唱え、「自称ユダヤ人の王」と書いてくれと言いますが、ピラトは「書いたものは書いたままにしておけ」と退けます。

この「王」という言葉は、彼らの間で争われた話題であり、最大の焦点でした。

このことをめぐって、ピラトはユダヤ人たちに、「もしこの人を許したなら、あ

「わたしはカイザルの味方ではありません。」(12)と脅された経緯があります。

ピラトにとっては、彼らに対する皮肉でもあったのでしょう。

しかし、このように記されること、それこそが、神のご計画のしるしだったのです。人々の策略や言い争いを超えて、「この方こそ王である」との事実が宣言されました。しかも、それはすべての民族、言語、文化の上に掲げられたのです。

この出来事は、イエスがただユダヤの王ではなく、全世界のまことの王であることを示す象徴となっているのです。

じゃあ、それはどういうお姿か、それがあの十字架にかけられたイエスさまなのです。それは、人々が思う「王の姿」とは違いました。 苦しみを負い、人々の罪を担い、十字架の上で命をささげる救い主としての王。福音は、ここに、人の罪と策謀を超えた神の主権と救いの御業を見せているのです。

●さいごに

わたしたちは18章からここまで、イエスさまをめぐる、この世の権力者たちの醜い争いと駆け引きの姿を見てきました。

しかし、イエスさまはその駆け引きの真ん中に立たされていながらも、静かでした。そして、2人の犯罪者たちと共に、その真ん中の十字架にはりつけにされました。

このイエスさまの姿は、この世の者の標準ではありません。違ったのです。そして、その” 違い ”をもってこの世にあって生き、すべての人の罪と悩み、醜い憎しみや敵意をすべて、その身に受けて十字架で苦しみ負うてくださったのです。

わたしたちは信仰によってこのイエスさまを見つめて、この方に” 違いがある ”、この方こそ救い主だ、この方こそ、「道であり、真理であり、いのちである」。この方に従っていこうと、歩みを始めたのです。それこそ、イエスさまにならうという、信仰者の歩みだと教えられているのです。

信仰者の幸いは、この方の生きざまを模範とすることができるということです。そして、そのように生きようとするわたしたちのために、聖霊さまが、助け手として内に外に働いていてくださることを経験できるということです。

さいごに聖書はわたしたちにこう励ましの言葉をくださることを見ておきましょう。ヘブル4:16 だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵みにあずかって時機を得た助けを受けるために、はばかりことなく恵みの御座に近づこうではないか。